

瀧島秀樹さん (57歳)

〒287-02  
千葉県香取郡大栄町十余三245-1728  
▲0478(73)4075

プロフィール

10年間の農機具店勤務の後、結婚と同時に28歳から農業に従事。現在、4.5haにニンジン栽培し、同氏が開発したニンジン播種機を使うことなどで、L、Mクラスの秀品だけで10a当たり8tという高収益の栽培をおこなっている。将来は30haのニンジン栽培を目指すという。その他、地域を越えた仲間と各種の作物を栽培し、共同で流通に取り組もうとしている。



写真1 ほとんどが秀品サイズだけという瀧島さんのニンジン畑の前で

だが、これでは下物の販売も気にする必要はないではないか！  
今年のニンジンの仕上りを見て、瀧島さん自身も、これまでの試行錯誤の成果にとりあえざる満足を感じているようだ。

ニンジン栽培30haを目指す

瀧島さんは昭和15年生まれの57歳。今年からご子息の敦志さん(25歳)が勤めを辞め、後継者として戦力に加わった。

経営に体裁の良い玄関は必要ない

瀧島さんが農業を始めたのは28歳。奥さんと

秀品だけで8tのニンジン栽培

瀧島さん方には、緑肥の鋤込みや播種作業時などに何度もお邪魔してきましたが、出上がった畑を見るのは今回が初めてだった。瀧島さんのニンジン作りや畑の技術については度々お話を聞いていた。しかし、あらためて畑を見て、まさにプロの仕事を見た思いがした。

瀧島さんの今年の冬ニンジンの収量は、L、Mクラスだけでも10a当たり8tもあるのだ。出荷箱数だから正確な数字だ。

畑でニンジンを目の端から順次に抜いても、出てくるのはL、Mサイズばかり。LLやSのサイズのニンジンはないのだ。1枚約1haの畑の所々に、そこだけ飛び

出たように背の高い株がある。それを抜くとLLサイズ。原因は先祖返りした種子に由来するようだ。また、播種時に2粒播きとなって株が密接した場所が形状の悪いニンジンになっているが、その数は極めて少ない。畑の段階でも、いわゆる下物がほとんど見当たらないのだ。

ニンジンを作る人なら、これがどれだけ素晴らしい成果であるかはお解りだろう。単に収量だけなら、冬ニンジンで6、7tという人もいるかもしれない。しかし、品物はLLサイズばかりという例が多い。いくら収量が多くてもそれでは収益性は向上しない。瀧島さんの場合は、味も色も形も文字通り一級品のL、Mだけの8tなのだ。

「いかに規格外れの下物を作らないか、やむを得ぬ下物をどう売るか」が経営の勸所だよ」と常々話していた瀧島さん

結婚して瀧島家に婿入りした時からである。瀧島さんの実家も大きな農家だが、農業を手伝った体験はなかった。結婚と同時に、高校卒業以来勤めていた農機販売店の仕事から農業に、ゼロから転職したようなものだった。

結婚した当時の面積は3ha。現在の自作地は4.5haだが、瀧島さんはニンジン栽培30haという経営計画を持っている。今なら面積を広げようと思えば近隣に幾らでも土地の貸し手はあるのだ。

農家になって最初の仕事はサツマイモ作りだった。大栄町はサツマイモの村なのだ。しかし、農業を始めて1、2年目の昭和42、3年に、瀧島さんは基幹作物をサツマイモからヤマトイモに換えた。

大栄町のサツマイモは古くから名前も売れていたし、高く売れるブランド品でもあった。しかし、瀧島さんは産地ブラ

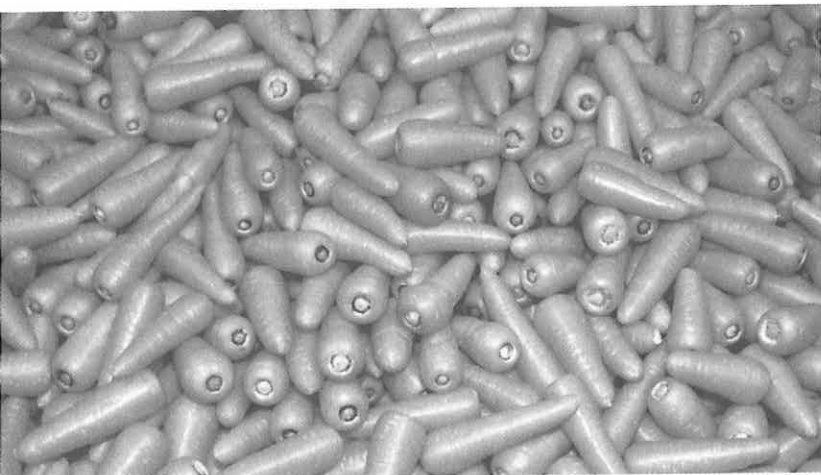


写真2 食味、色、形も一級品だけの瀧島さんのニンジン



▲写真3 20インチのプラウでソルガムを立毛状態のまま鋤込む。

▼写真4 ソルガム鋤込み後をパワーハローで碎土・鎮圧する



ンドだけで優位性を持ち続けることの将来的な難しさを感じていたのだ。

ヤマトイモは儲かった。当時は種代も安く、高くも売れた。皆が始めるようになったが、やがて、大きく作れる人だけが残り、20a、30aの人は消えていった。瀧島さんは最大3.2ha位まで拡大した。そのため瀧島さんは北海道のメーカーから2畦のポテトプラントを購入し、自らヤマトイモの植付機に改造して利用したりもした。トラクタ用の2畦プラントを使うことで植付け深さや条間を均一にしてヤマトイモ栽培の質を高めるためだった。もちろん省力効果も大きかった。

ヤマトイモを通して市場との付き合いが始まり、量販店や卸は何を求めなのか、農業経営の安定化にとって何が必要なのかも見えてきた。大規模化を目指す限り、

品質の高さだけでなく、通年出荷できないければ市場で一定の地位を確保することはできないことも知った。

生産者の立場だとヤマトイモではそれは難しかった。また、単価的には悪くはないが、資材費や種子代等の他、労力面など生産コストが大きくなっていった。そして始めた現在のニンジン専業経営なのだ。今から10数年前のことだった。ヤマトイモ時代の信用から市場も協力してくれて売り先を探してくれた。

勉強もしたし、他産地からも学んだ。でも、何より土を作ることに、いかに作物を育てる条件としての土、畑、播種床を整えるのが肝心なのだというのを、作り続ける体験の中から学んでいった。瀧島さんは、土作りは経営のスタート地点なのだと考えている。その上にこそ、播

種機その他の試行錯誤があるのだと。

### 機械化は栽培の質を高める

瀧島さんのニンジン作りについて話そう。瀧島さんの今年のニンジンは、7月末から8月初旬に播種する冬ニンジンが3haと春ニンジンを1.5haだ。

ニンジン作りの作業体系は次の通りだ。

瀧島さんの場合、ニンジンを播種する前には必ず緑肥を作るし、畑が空く場合にはこまめに様々な緑肥を播き、その後をプラウで鋤込み、整地・鎮圧する。

施肥量は窒素が7kg程度と通常の半分程度だ。

まず、春ニンジンの跡地にソルガムを播き、ソルガムを立毛状態のまま20インチのプラウで最大限の深さに鋤込む(写真3)。深さは40cm位だ。

「普及所などでは『緑肥は砕いてから鋤込まないと障害が出る』なんて指導しているが、あれはロータリしか使ったことのない素人の意見。緑肥鋤込みから播種までの期間は1週間程度だが障害は何も無い。プラウやサブソイラを使っていればそんな障害は問題無い。それにプラウなら跡形も無く鋤込める」と瀧島さんは笑う。

むしろ、それが瀧島さんのニンジン作りのポイントの一つなのだ。長いままの緑肥を鋤込むからこそ夏の乾燥時期でも播種床に緑肥の水分が補給されるというのだ。緑肥を粉碎してから鋤込む方法と比べてみると、粉碎した場所では土が乾燥してしまい、発芽率が悪く、一斉

発芽もできなかったと瀧島さんはいう。それに、長いままのソルガムが深い場所に鋤込まれることで、播種床の物理性改善の効果も大きいそうだ。

「冬ニンジンの品質や形状を揃えるには、播種時期の乾燥のために悪くなりがちな発芽をいかに揃えるかにある。一斉に発芽をさせられれば、それで八分方の仕事は終わったといってもよい」と瀧島さんはいう。

それには播種日も重要な意味を持つ。最高の発芽揃いを求めるなら、今回の品種だと大栄町での播種は8月の4日から6日までの3日間に行なう必要があるという。この播種日を割り出したのも長年の観察と試行錯誤の結果だ。面積が大きくなればそれに合せるのも難しくなるが、瀧島さんは、その日の播種に合わせるためにこそ、圃場の準備を綿密にし、播種機の能力も最大限に上げようとしているのだ。機械化の目的は単なる省力ではないのだ。むしろ作業の精度を上げ、栽培の質を高めるためにこそ機械化が必要なのである。時間や季節という流れの中にある自然をいかに利用しきるかという意味でこそ高効率化が要求されるのだ。

プラウによる耕起も、パワーハローを使うのも、緑肥の鋤込み方を考えるのも自然の摂理に合わせるためなのだ。

プラウで緑肥を鋤込んだ後は、螺旋状の鎮圧ローラを持つ縦軸ハロー「パワーハロー」(写真4)で碎土・鎮圧する。この機械については本誌18・20号「女化通信」及び19号「畑用ハロー特集」でも紹介しているのでご参考願いたい。



写真5 瀧島さんの播種機。パワーハローにプラスチックローラと多木式のロール式播種機を複合させたもの。播種条数は6~8条(1工程12~16条)で各種ためしてみた

梅雨明けの暑く土壌の乾燥しやすい時期になる冬ニンジンの播種は、発芽時に乾燥を受けやすい。ロータリで過剰な碎土をしたままだと畑からの水分の蒸散も激しく、さらに毛管現象で土層の表面に肥料分が上昇し濃度障害が起きることもあるのだ。だからこそ、プラウでの大きな土塊のままの耕起と、碎土の後には確実な鎮圧が必要なのだと言っている瀧島さんはいう。

縦軸ハローでの作業は、碎土率も優れ、ローラーで締めた後の土層表面に、機体

後部の土止め板の上をオーバーフローした細かな土が被さっていく。瀧島さんはその土層形成に満足しているようだ。また、鋤込んだ緑肥を掻き出すようなこともない。

### オリジナル播種機の開発

そしてもうひとつ、今回のニンジン作りのポイントは、瀧島さん自身のアイデアから生まれた播種機にある。

この開発は女化の高松さんの所で行なわれた勉強会がきっかけだった。高松さんが初めてのニンジン作りのために先生役として来ていただいた瀧島さんが、高松さんが入れた多木更(現在はアグリテックノ矢崎に社名変更)のロール式播種機「クリーンシダー」(18号「女化通信」で紹介)の播種精度を見たことに始まる。それを見た瀧島さんは、スガノのパワーハローに組み合わせ、もうひとつ工夫すれば具合の良い播種機になると考えたのだ。

完成したのが写真5のセットだ。パワーハローの後にもう1本のプラスチック製の太径鎮圧ローラを取り付け、さらにその後方にロール式播種機「クリーンシダー」を組み合わせたものだ。パワーハローの螺旋ローラだけでは播種精度が上がらないという考えからだ。

播種時には、条間14cmの6条で株間を6.5cmに設定し、畦間を60cmに開けた2畦12条を1工程で播種する形とした。条数の変更も可能だ。

収量をとるために単位当たりの株数を最大限に増やしたい。さらに形状や品質を揃えるには、正確な1粒播きでの播種密度と播種深さを得たい。土壌の水分状態を安定化させるためには鎮圧も必要だ。間引きも無くしたい。それで株間、条間が揃い、1本ずつ一斉に発芽すれば秀品だけのニンジンが取れるからだ。緑肥、プラウでの反転耕起、碎土・整地・鎮圧にこだわるのもそのためだ。

瀧島さんの今回の10a当たり株数は、条間14cm、株間6.5cmの約7万6千株。1粒播きだから播種粒数も10a当たり7万6千粒でよい勘定だ。種子のパッケージには10a当たり10万粒を播けとある。通常は、一箇所に2、3粒程度を播いて、その後の間引きをして最終の苗立ち株数を3~4万株にするというのが通り相場なのだろう。

だから瀧島さんの場合、種子代にかかるコストは面積当たりで考えただけでも3割は軽減できた計算になる。

間引きもせず、除草作業も播種後に1回除草剤を撒くだけだ。間引きの手間は通常10a当たり4、5人はかかる。労働単価は6500円程度だというのが、そのコストも必要なくなった。

その上で、L、Mのみの収量が8t、そしてこの揃いと品質なのである。

### 「土作り」は経営の出発点

取材を終え、一緒にビールを飲んでいたら、瀧島さんはこう言った。

「ほら、玄関作りって言うでしょ。仕事も人づきあいも玄関先の体裁をつくら

っていたのでは駄目。我々は人に仕事を見せたり、その評判を聞くために仕事をしているのではない。収入を得るために農業をしているのですよ」

「玄関作り」とは、道路際など人目につきやすい場所(玄関先)だけを見栄え良く綺麗な仕事をする農家の意識のことだ。瀧島さんは、大事なものは作物であり、作物を育てるための条件としての土なのだという。作業跡の綺麗さではなく、人には見えない土の中がどうなっているかを問うべきだというのだ。

「でも平均的な農家の意識はそうじゃない。だから人と違うことに取り組むこともできない。いくら畑の端の始末に体裁を付けても収益が上がらなければ経営にならないでしょう」

全国に名の知れたサツマイモの産地であり、ニンジン、ゴボウなどの純畑作地帯であるにもかかわらず、相変わらず、プラウでやると畑に溝が出来てとか、枕地が綺麗に仕上がらないと言っている瀧島さんは笑う。ロータリだけの仕事から抜け出られないなんていう農家の意識も玄関作りに引きずられるからだという。

「70馬力、90馬力のトラクタを買って後ろにはロータリしか付いていない畑作農家や酪農家もいる。畑作経営でプラウが必要かどうかなんて考えている位なら、そもそも農業や大規模な野菜作りなんて止めた方がよい。土作りは経営の出発点。問題はそれ以降の技術なのであり、何のための機械化なのかということですよ」と瀧島さんは話していた。